ギ科の虫えいをホストにすることが知られているが，ブドウ科の虫えいから得られた例は知られていない．単に摂食に訪れていただけかもしれないが，比較的まとまって得られた例として報告しておきたい．なお，本種の属名は森本(2011)に従った．

本知見は，日本ゾウムシ情報ネットワーク（JWIN）の第 11 回地域ファウナ調査会によって得られた．本調査会は伊澤和義氏にお世話いただいた．また，本種の原記載および属名に関しては野津裕氏に，東北地方の分布に関する知見は尾崎俊寛氏に，植物の種名は久米修氏にそれぞれご教示いただいた．ここに記して厚くお礼申し上げたい．

引用文献

Kono, H., 1930. Langrüssler aus dem Japanischen Reich (Schluss). Ins. Mats.,5 (1): 1–31.
久米加寿徳 ,2009. 四国におけるチビシギゾウムシの採集例 . へりぐろ ,（30）：44.　瀬戸内むしの会 .
森本　桂 ,2011. 日本産シギゾウムシ類の概説 . 昆虫と自然 , 46(5):4–15.
野平照雄 ,1986. チビシギゾウムシを岐阜県で採集 . 月刊むし , (185): 40.
下山健作・福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・山内　智，1986. 6 昆虫・蜘蛛 . 下北半島の自然：84–142. 青森県立郷土館 .

（藤本博文　760-0005　高松市宮脇町 1-17-4）

書評

「カトカラの舞う夜更け」
新里達也（著）256pp. 四六判，海游舎.

2014 年の日本甲虫学会の採集例会は，7 月に徳島県の剣山で開催された．夫婦池に面した“ラ・フォーレつるぎ山”に泊まり，参加者は年に 1 回の行事を楽しんだ．夜は宿舎の周辺で灯火採集のセットが準備されていた．白幕に飛来する雑甲虫を採集する人や，それを眺めながら酒を手にして歓談する人がいたなかで，懐中電灯を掲げながら近くの林から宿の前の広場に戻ってきた人物がいた．新里達也氏であった．意外な光景だったので，「何してるの？」と質問してしまった．「カトカラを採りに行ってたんだけど ……」との返答があり，同氏が甲虫ではない蛾のカトカラに興味を抱き採集していることをこのとき初めて知った．

本学会の前会長である新里達也氏は，言わずと知れたカミキリムシの研究者．著書で「日本産カミキリムシ」（大林延夫氏との共著，東海大学出版会）があるほか，「野生生物保全技術」（佐藤正孝氏との共編，海游舎）があるなど保全生態学の専門家としても知られる．そんな新里氏から本が届いた．封を開けると，妖艶な表紙が目に飛び込んできた．分島徹人氏の見事な絵で，暗闇に鱗粉を散らしたかのような背景に 2 頭のカトカラが舞っていて，タイトルは「カトカラの舞う夜更け」とある．「そうか，新里氏は，ついに蛾の本を執筆したのか」と思った．

ページをめくると，意外や意外，蛾（カトカラ）の本ではなかった．もちろん，彼がいま熱中しているのはカトカラであり，この蛾の話も登場するが，本書の主体はこれまでにいくつかの雑誌に書いてきた数々のエッセイで，書下ろしも含まれている．1 章が「環境の仕事」，2 章が「虫の研究」，3 章が「交友録」となっていて，非常に読みやすい．どこを読んでも味わい深いが，交友録が面白いだろう．虫屋が元気で勢力旺盛だった時代の話がとても面白くて懐かしく，今となっては羨ましくもある．同世代の人はもちろん，年下の世代の人にも是非読んでもらいたい本である．

私と新里氏が初めての出会ったのは，台湾の埔里であったと思う．“夢虫会”で新堀豊彦さんや高桑正敏さんらと訪台されていたときに宿で一緒になり，屋台に出かけた．その後，日本鞘翅学会や日本甲虫学会の大会・例会で同席する機会が増え，私が編集する「月刊むし」にもご寄稿いただくなど，交流は増した．

新里氏も還暦を過ぎ，仕事も一線から身を引かれたとのこと．今後も元気でカミキリムシの研究を継続し，後進の指導とともに，大いにカトカラをはじめとした虫との付き合いを楽しんでいただきたいものである．

（谷角素彦）